

DS-diagram の初等変形とは

山下正勝 (東洋大 工)

つらつら考えるに 二種類の変形 (正逆を区別すれば四種類の変形) を DS-diagram の初等変形とするのが妥当ではないかと思うようになった. その根拠の一端を示すのがこの小論の目的である. 先ず type I, II の変形を次のように定める.

定義	type I ⁺ の変形	$\leftrightarrow (1-A) \Rightarrow (1-B)$
	type I ⁻ の変形	$\leftrightarrow (1-B) \Rightarrow (1-A)$
	type II ⁺ の変形	$\leftrightarrow (2-A) \Rightarrow (2-C)$
	type II ⁻ の変形	$\leftrightarrow (2-C) \Rightarrow (2-A)$

さらに I⁺, I⁻ を併せて type I の変形, II⁺, II⁻ を併せて type II の変形 と呼ぶことにする. type I, type II の変形を総称して 初等 DS-変形 ということにする.

さきに DS-diagram の変形として, D_1 -, D_2 -, D_3 -, D_n - ($n \geq 4$) の各変形を導入した. [数理研講究録 563 (1985), 207-223 および 575 (1985), 28-41]. そのなかの D_2 -変形が type II⁻ の変形であり, D_3 -変形が type I⁻ の変形である. また, D_1 -変形は「near miss を犯した D_n -変形」と見なすのがよさそうである. このことは後の議論から分かるであろう. そこで $(3-A) \Rightarrow (3-B)$ は従来通り D_n -変形 ということにして, $(4-A) \Rightarrow (4-B)$ は D_1 -変形 改め D_n^* -変形 と仮称する.

定理 1. D_n -変形 ($n \geq 2$) および D_n^* -変形 ($n \geq 2$) はいずれも 初等 DS-変形 を有限回 ほどこして得られる変形である.

証明 数学的帰納法による.

D_1 -変形についての証明: D_2 -変形: (5-A) \Rightarrow (5-B) は type II^- にほかならない.

D_2 -変形: (6-A) \Rightarrow (6-C). これは実は type I^- なのであるが 図のような展開で 数学的帰納法に乗せることができる: (6-A)の辺 X_3 に type I^+ をほどこして (6-B)を得る.

(6-B)の斜線面に D_2 -変形をほどこして (6-C)を得る. すなわち

$$D_2\text{-変形: } (6-A) \xrightarrow{I^+} (6-B) \xrightarrow{D_2} (6-C).$$

同様にして

$$D_4\text{-変形: } (7-A) \xrightarrow{I^+} (7-B) = (7-C) \xrightarrow{D_2} (7-D).$$

$$D_6\text{-変形: } (8-A) \xrightarrow{I^+} (8-B) \xrightarrow{D_2} (8-C) = (8-D).$$

これで どうすれば数学的帰納法に乗せればよいか分かる.

D_n^* -変形についての証明: D_{2n}^* -変形: (9-A) \Rightarrow (9-B) は type II^- にほかならない.

D_{2n}^* -変形: (10-A) \Rightarrow (10-B) ... 辺 A_2 と辺 Y_2 を結んで type II^+ をほどこして得られる.

(10-B) \Rightarrow (10-C) ... 斜線面に type I^- をほどこして得られる.

(10-C) \Rightarrow (10-D) ... 斜線面に D_{2n}^* -変形を適用.

D_n^* -変形については証明できたものとして D_{n+1}^* -変形について定理がなりたつことを示す.

$$D_{n+1}^*\text{-変形: } (11-A) \xrightarrow{II^+} (11-B) \xrightarrow{I^-} (11-C) \xrightarrow{II^-} (11-D) \xrightarrow{D_n^*} (11-E).$$

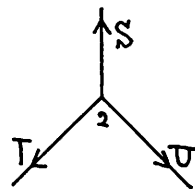
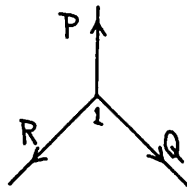
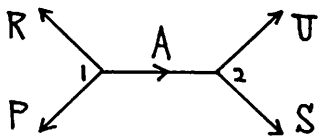
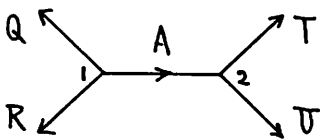
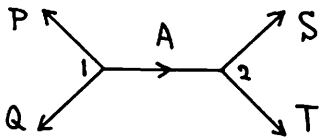
(証明終わり)

定理 2. type I と type II は互いに独立な変形である.

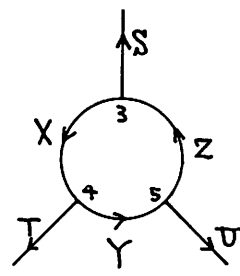
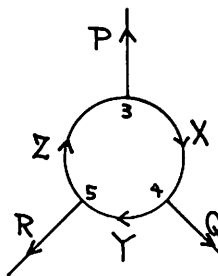
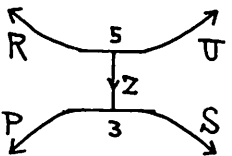
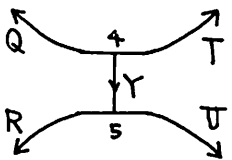
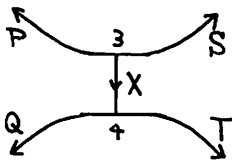
証明 (12-A) \Rightarrow (12-B) \Rightarrow (12-C) を見てみよう. 4頂点のグラフから type II^+ で12頂点のグラフに移り, type I^- で8頂点のグラフに移っている. type II の変形による頂点の変化は ± 8 であるから (12-A) \Rightarrow (12-C) は II だけでは移り得ない変形である. したがって type I は必要である. また type I が実行できるためには 辺の両端が同じラベルであってはならない. しかるに, (12-A) \Rightarrow (12-C) なる変形の出発となる4頂点のグラフでは すべての頂点が同じラベルにならざるを得ないから, type I だけで変形 (12-A) \Rightarrow (12-C) を実行しようにも始動できないのである. よって type II も必要である.

(証明終わり)

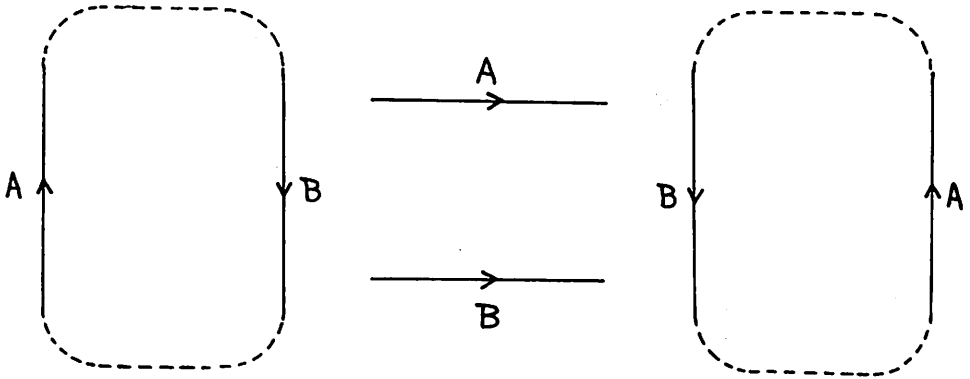
(1-A)



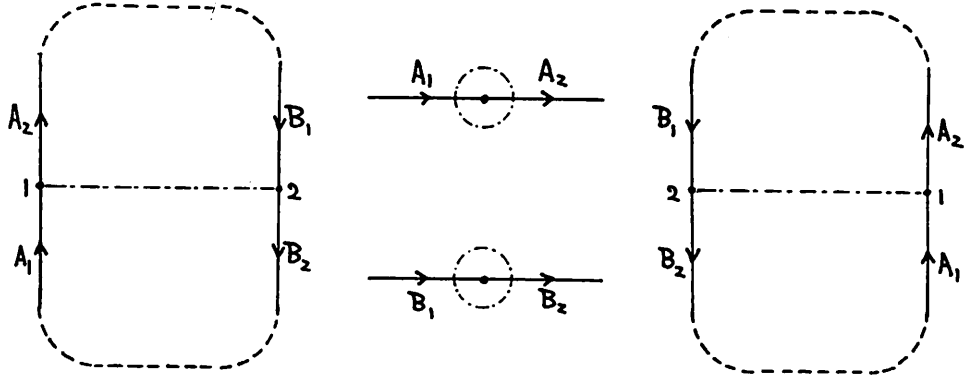
(1-B)



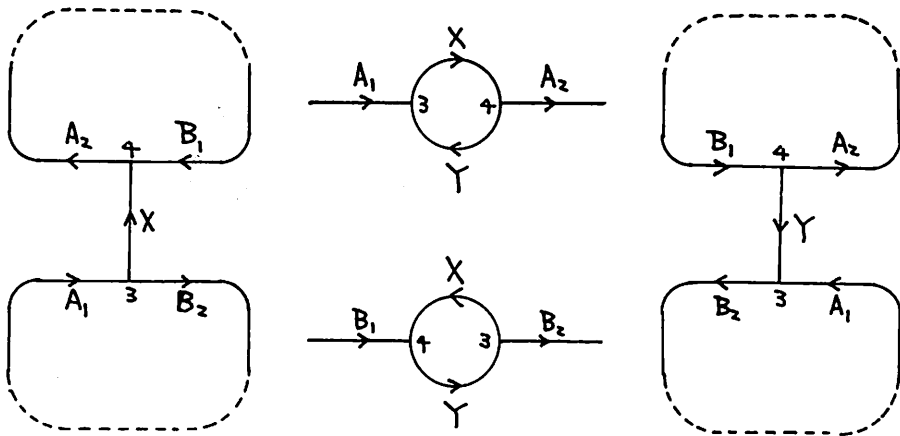
(2-A)



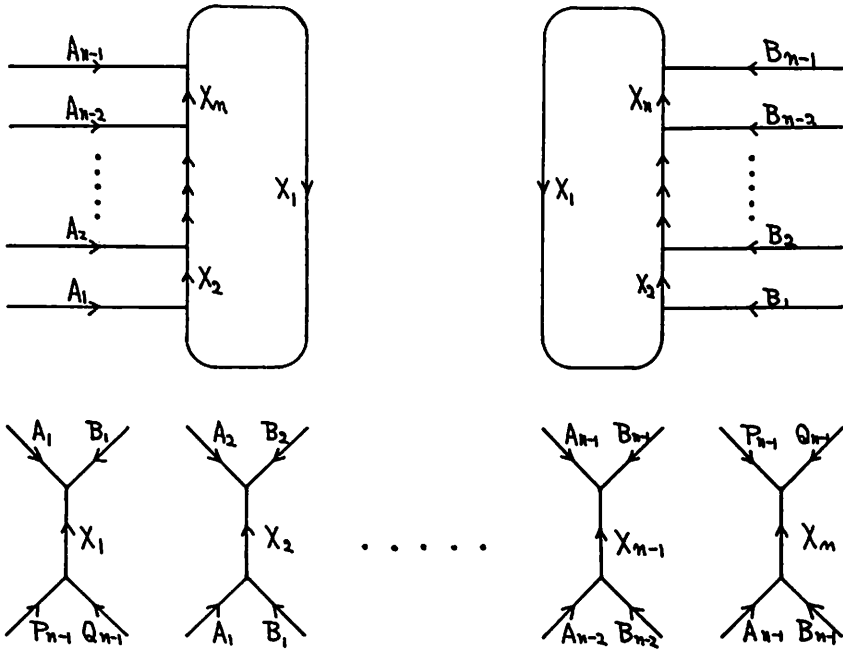
(2-B)



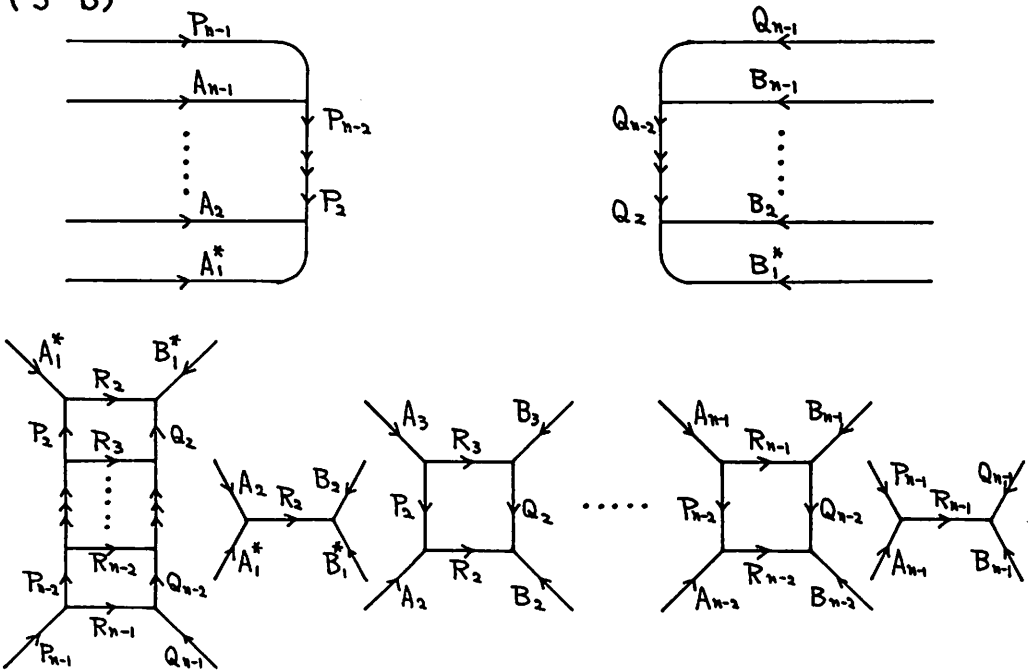
(2-C)



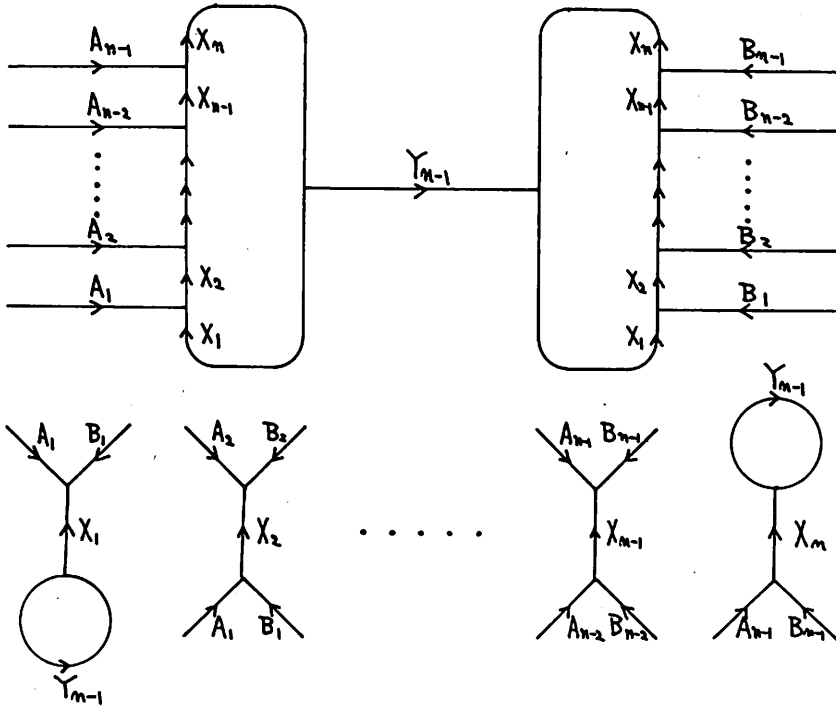
(3-A)



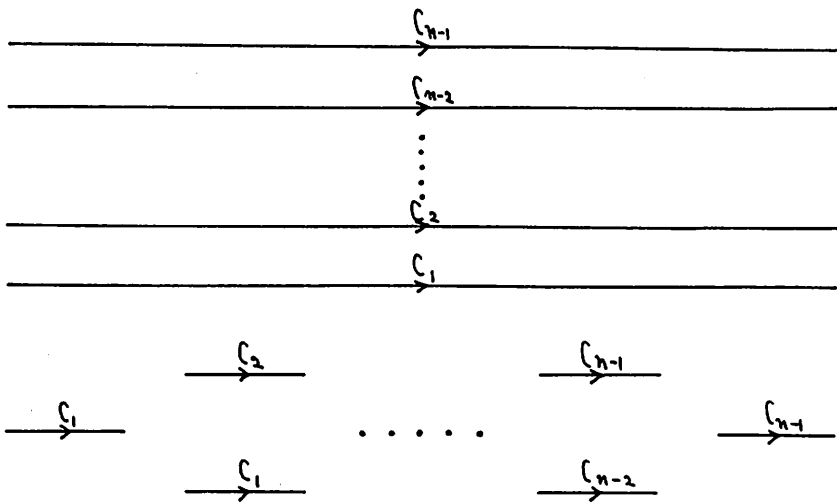
(3-B)



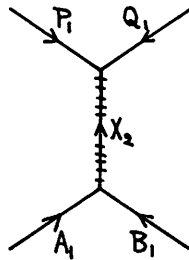
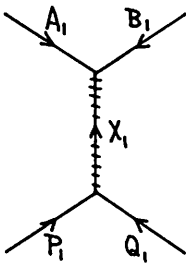
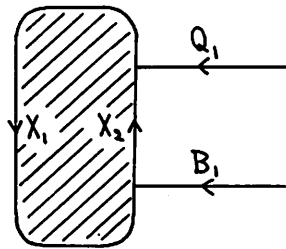
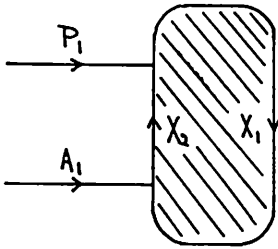
(4-A)



(4-B)

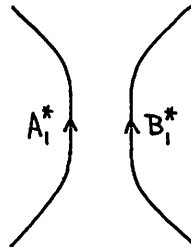
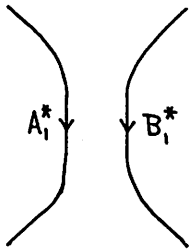
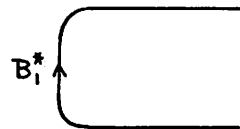


(5-A)

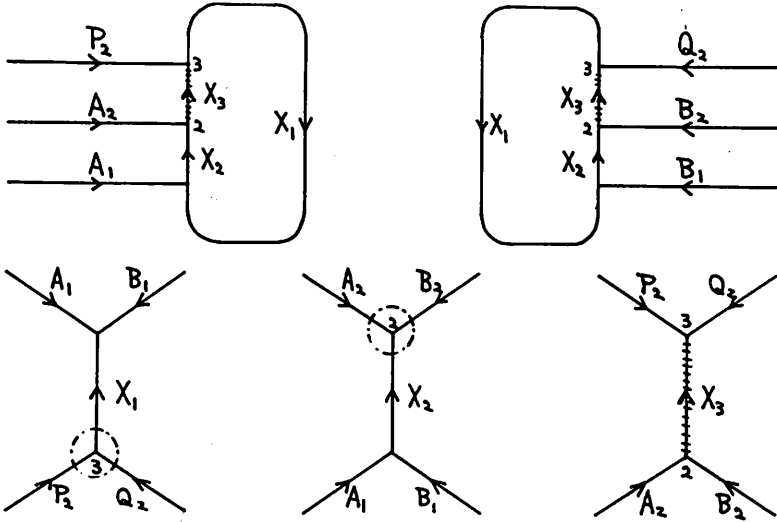


(5-B)

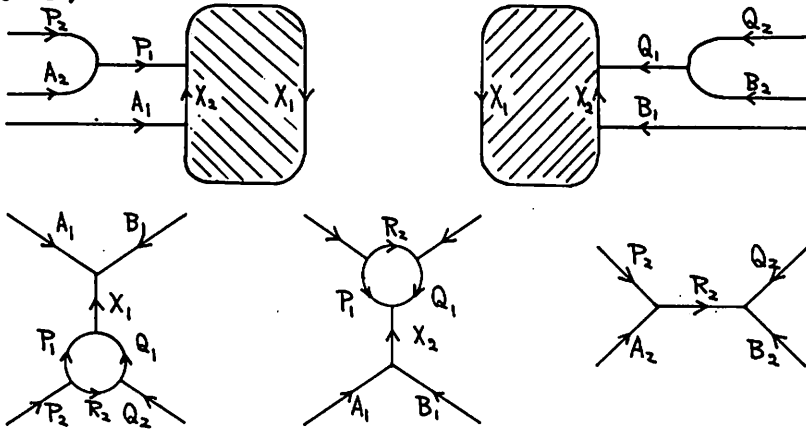
$$\begin{cases} A_1^* = A_1 \bar{P}_1 \\ B_1^* = B_1 \bar{Q}_1 \end{cases}$$



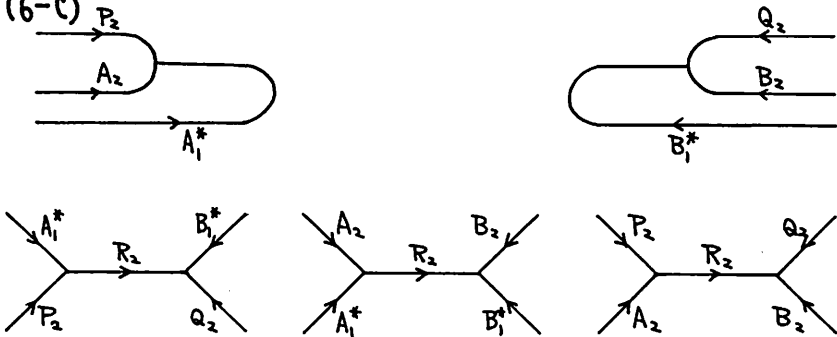
(6-A)



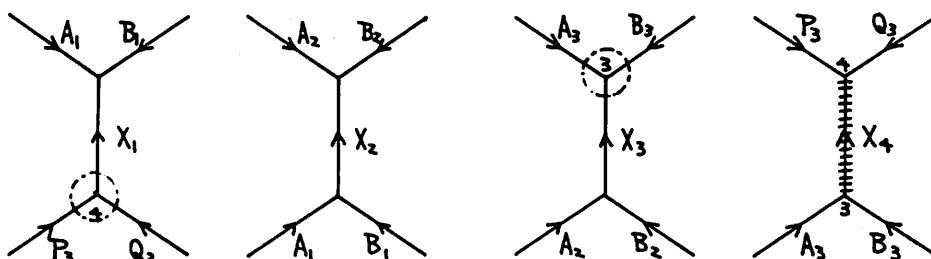
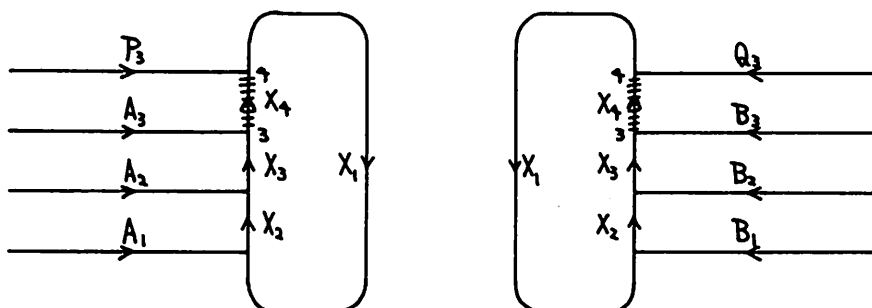
(6-B)



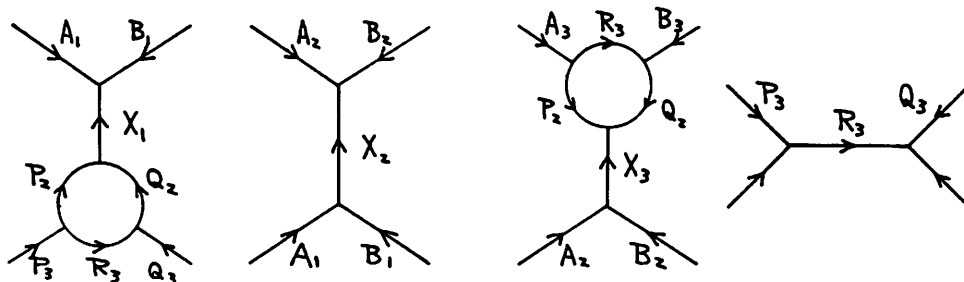
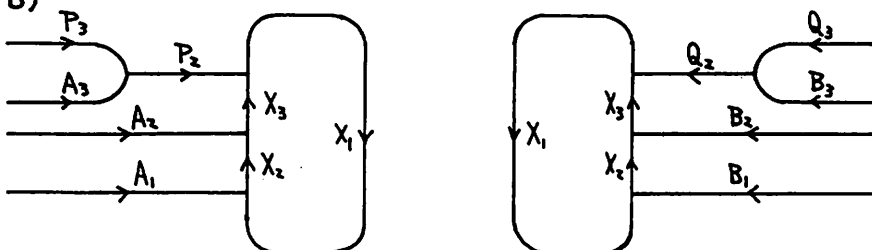
(6-C)



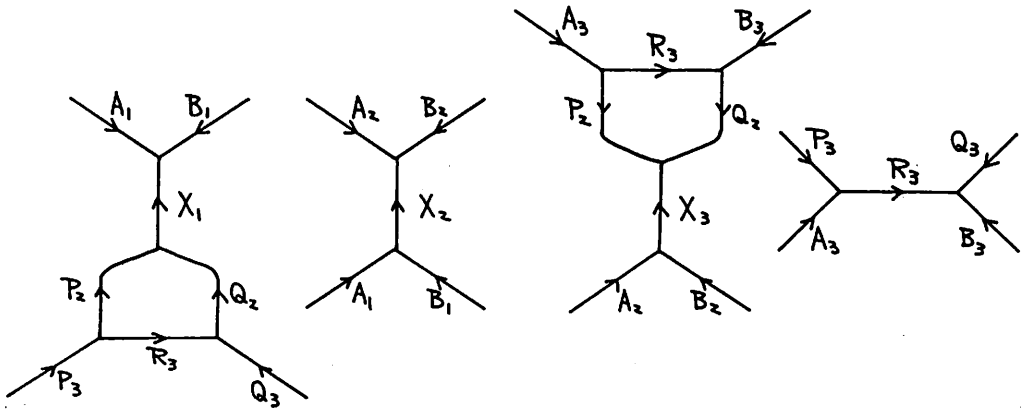
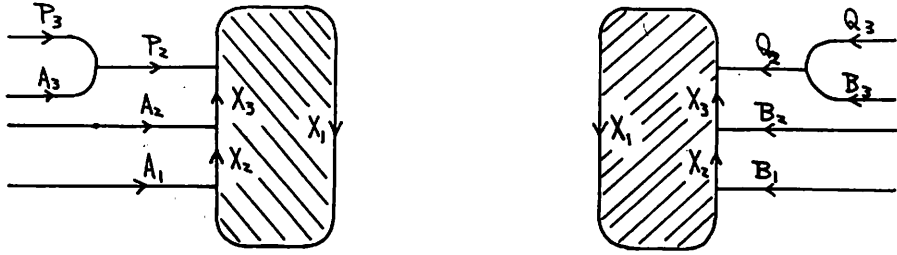
(T-A)



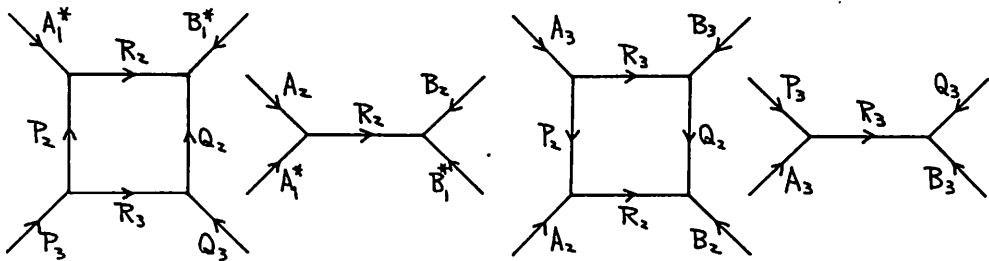
(T-B)



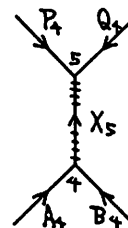
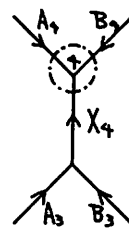
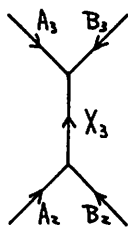
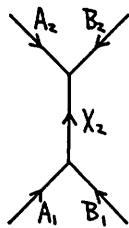
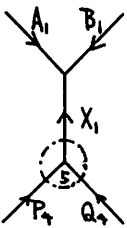
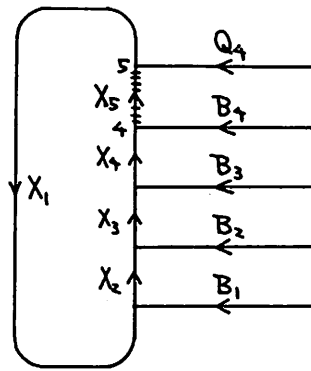
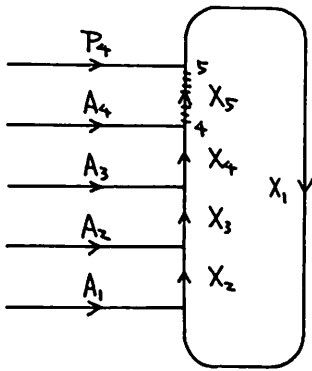
(T-C)



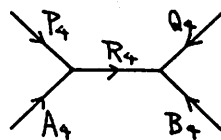
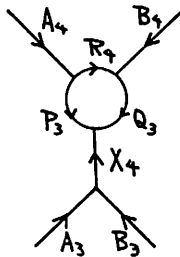
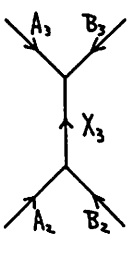
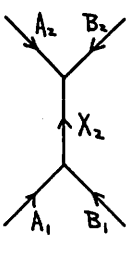
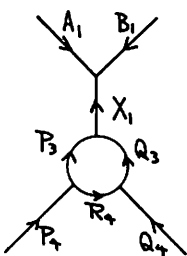
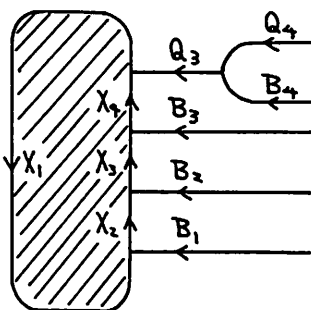
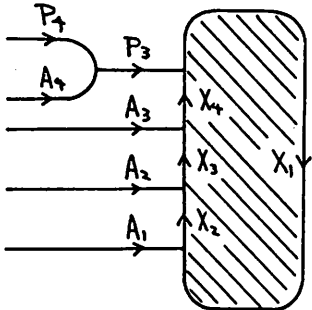
(T-D)



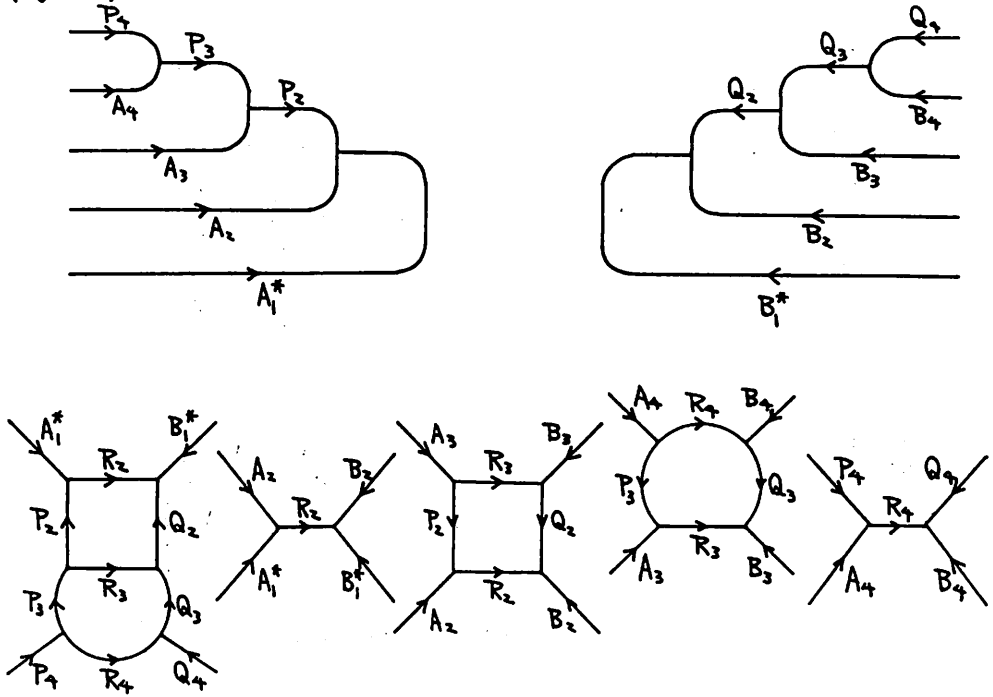
(8-A)



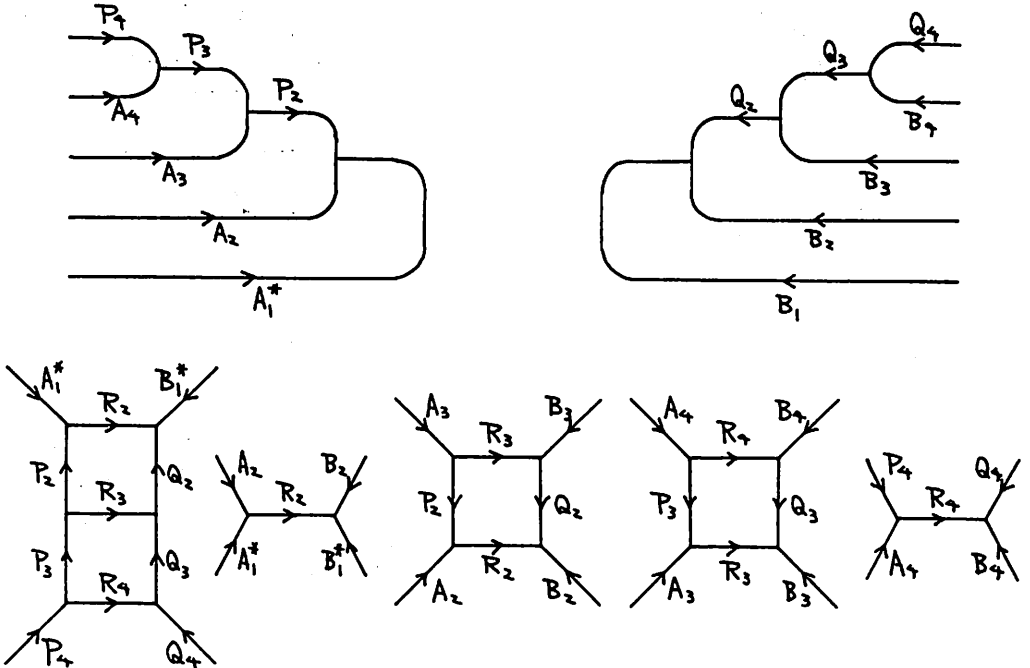
(8-B)



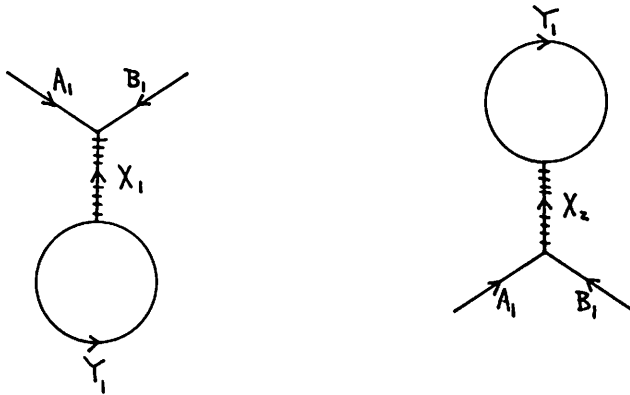
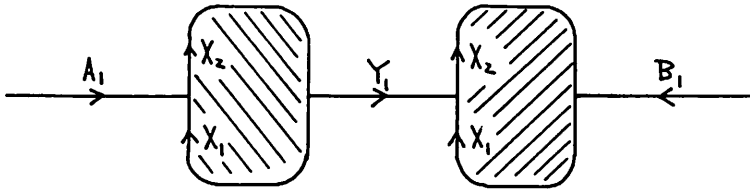
(8-C)



(8-D)

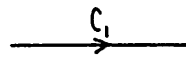
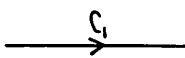
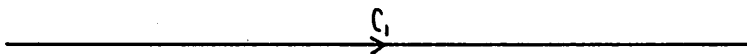


(9-A)

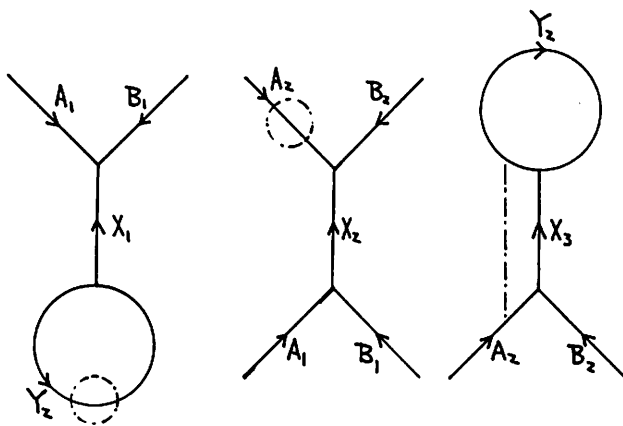
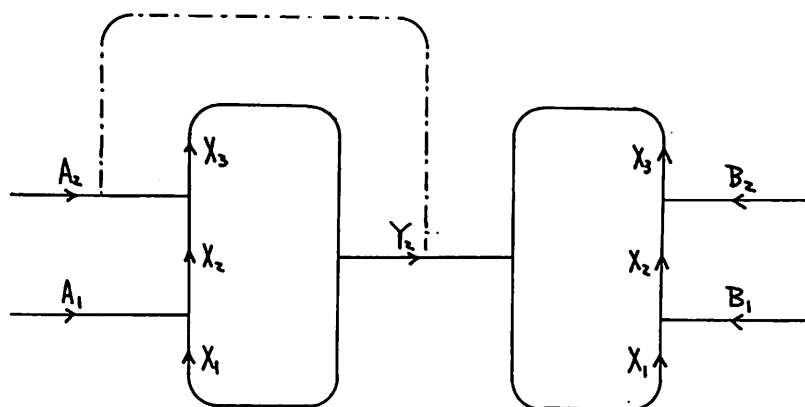


(9-B)

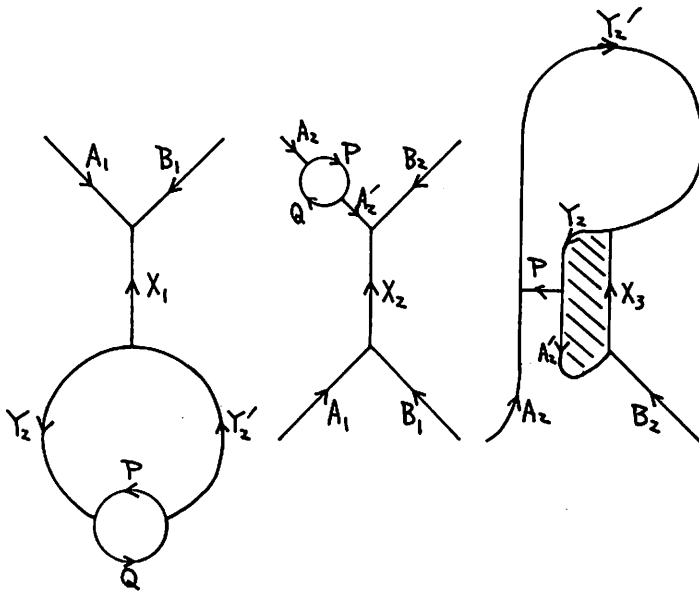
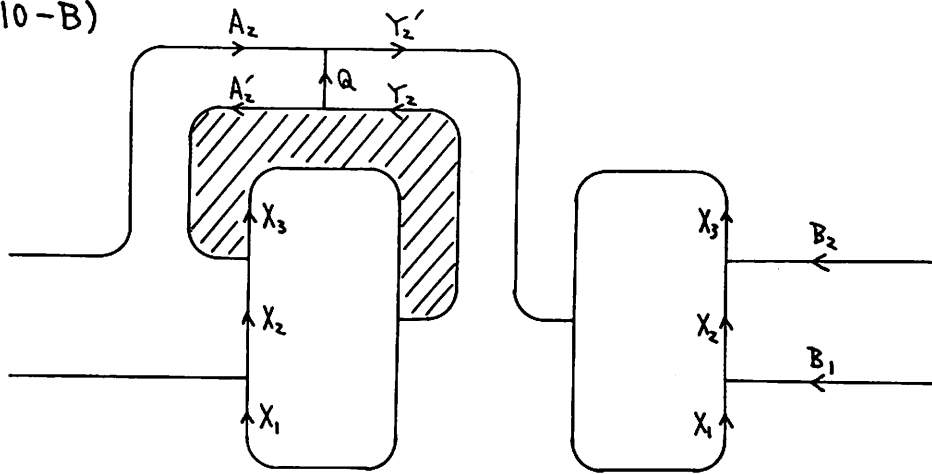
$$(C_1 = A_1 \bar{B}_1)$$



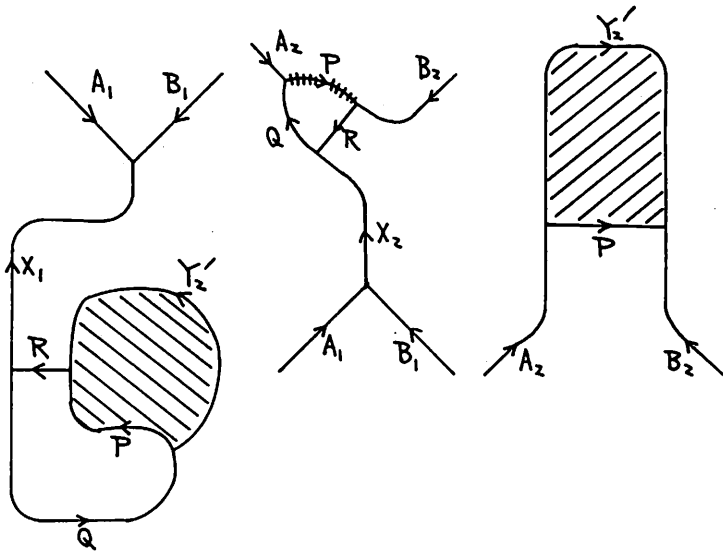
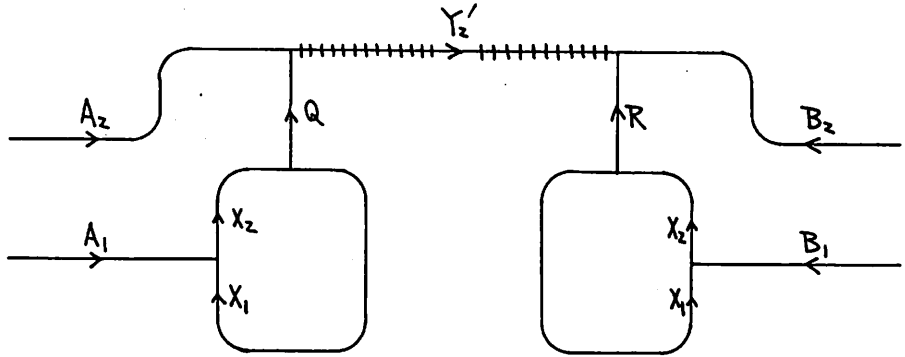
(10-A)



(10-B)



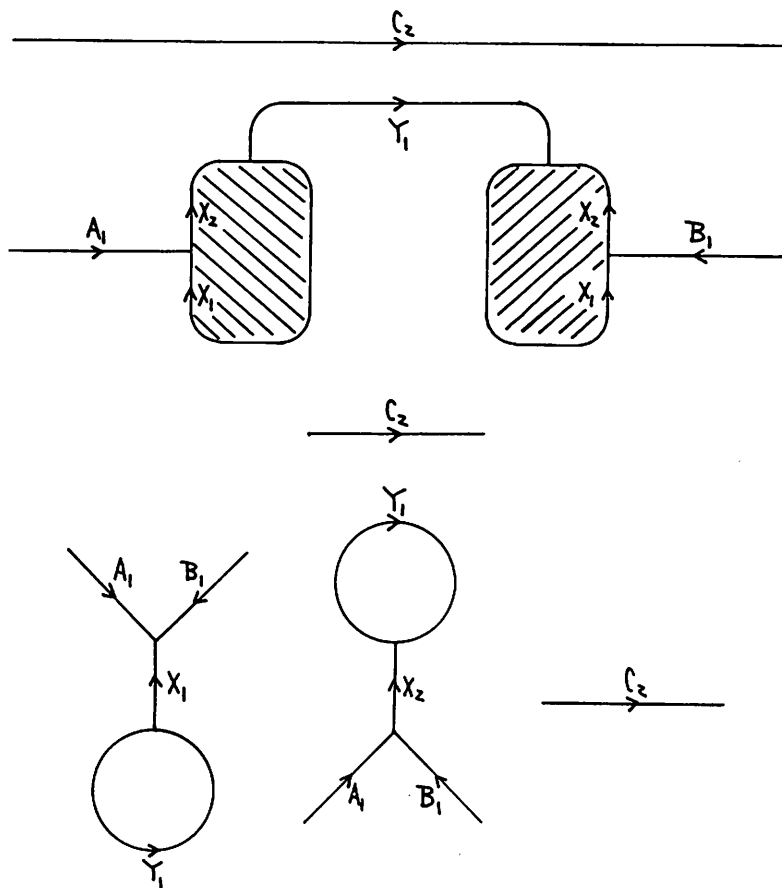
(10-c)



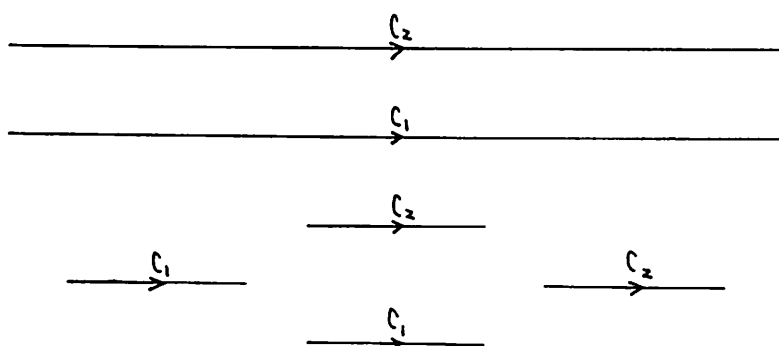
(10-D)

$$C_2 = A_2 \bar{B}_2$$

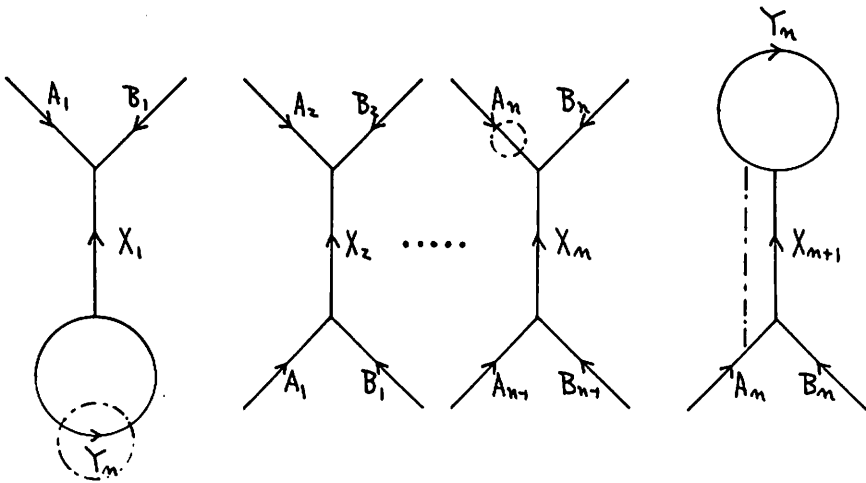
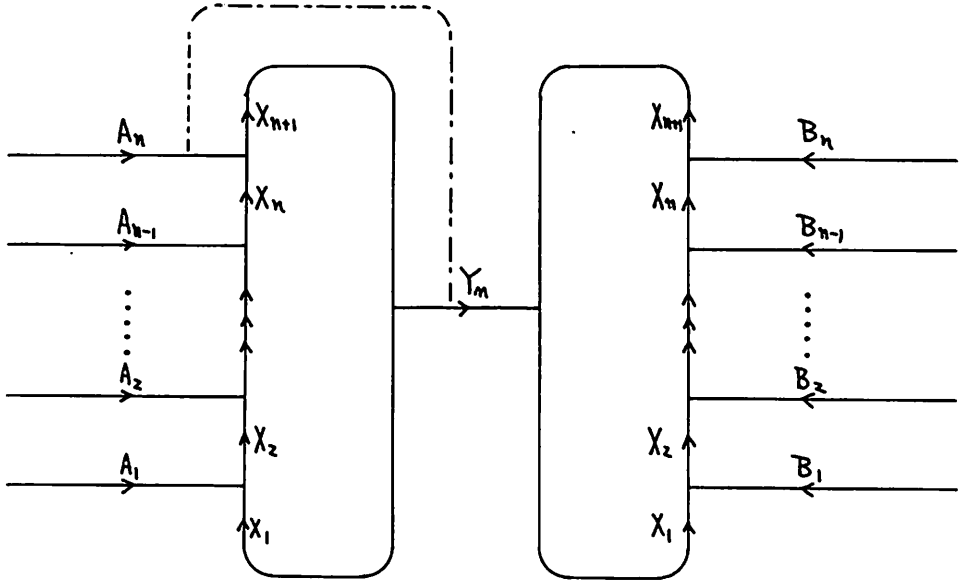
$$Y_1 = Q \bar{R}$$



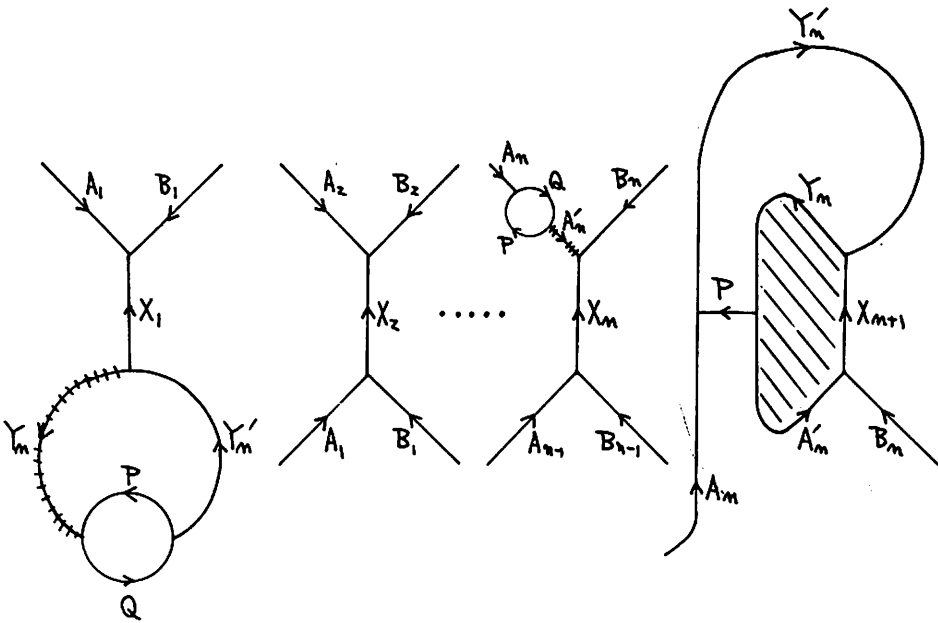
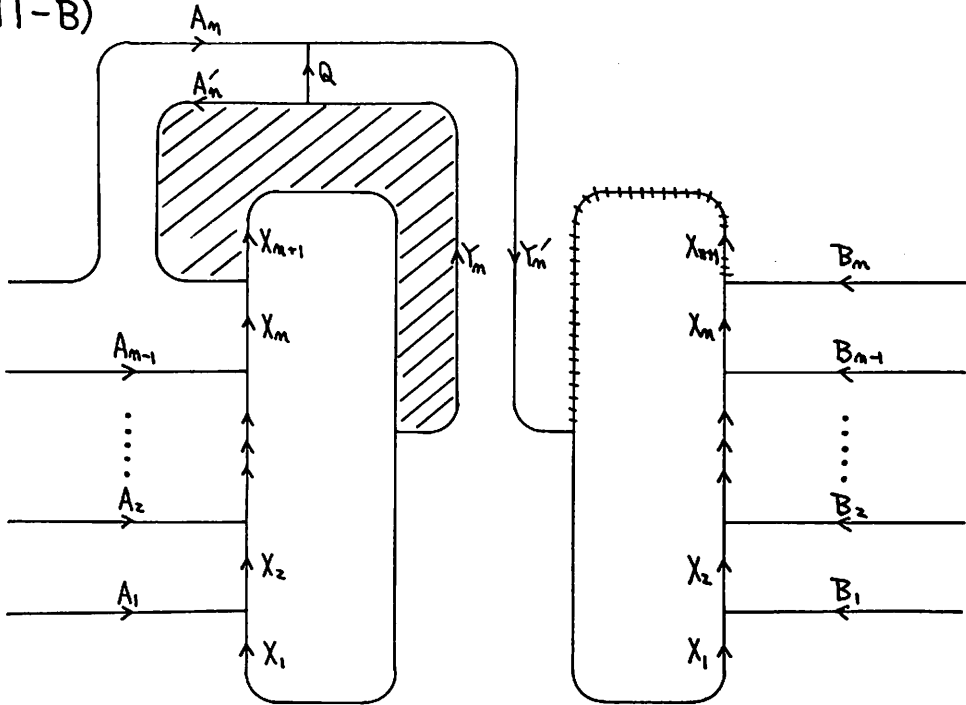
(10-E)



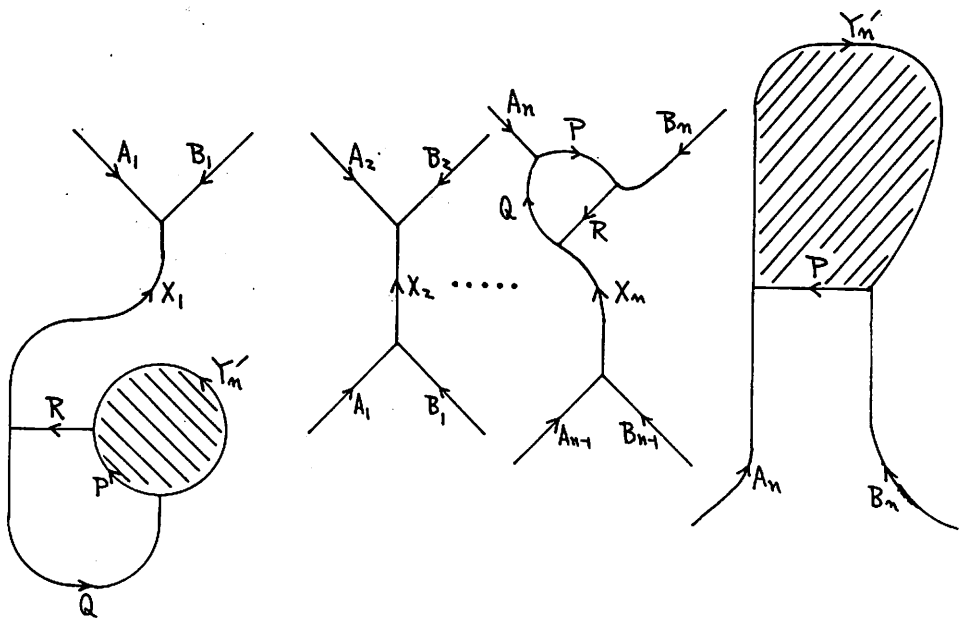
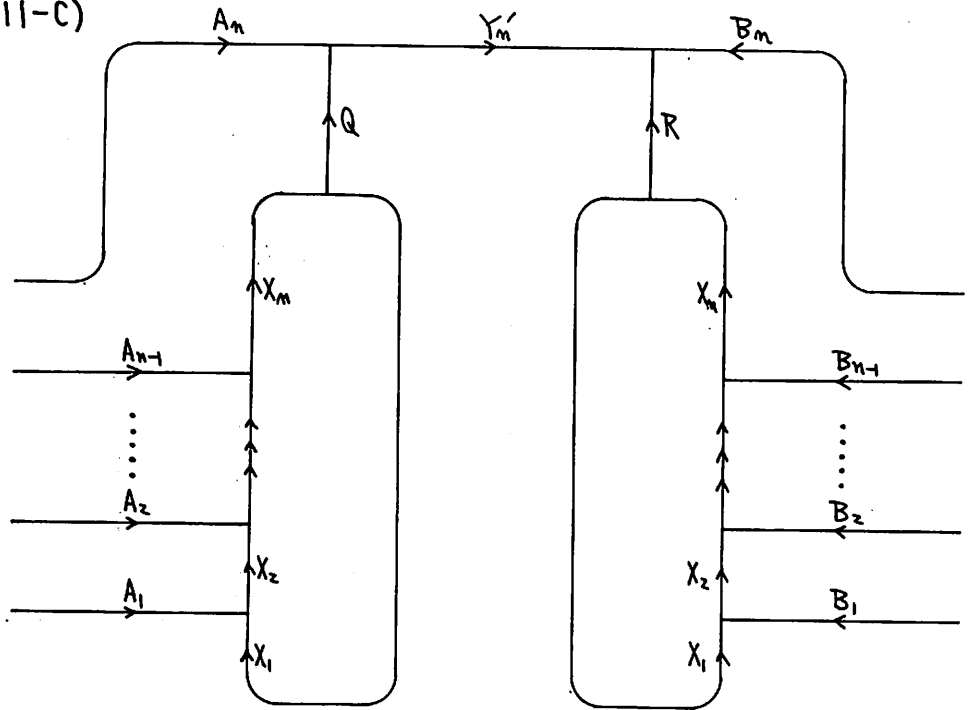
(11-A)



(11-B)

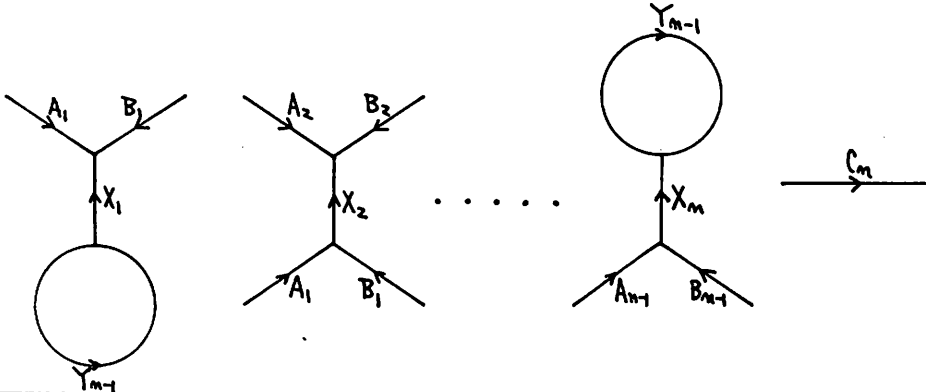
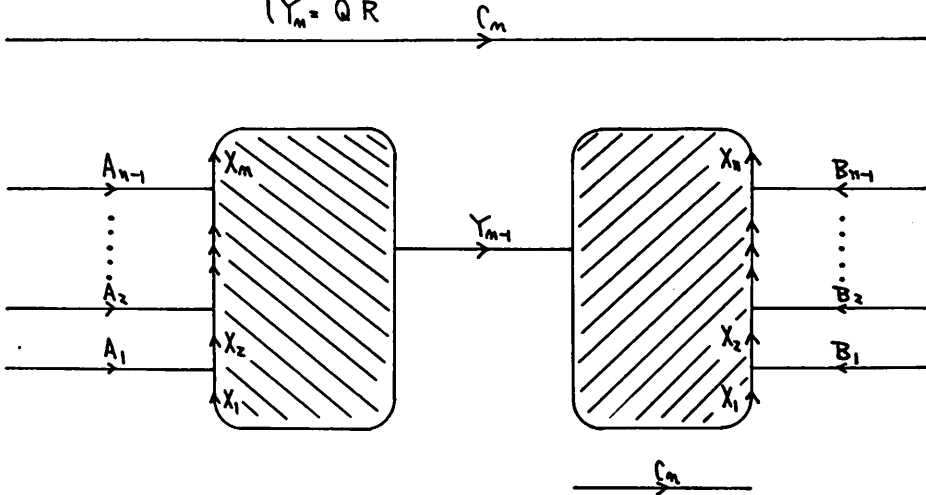


(11-C)

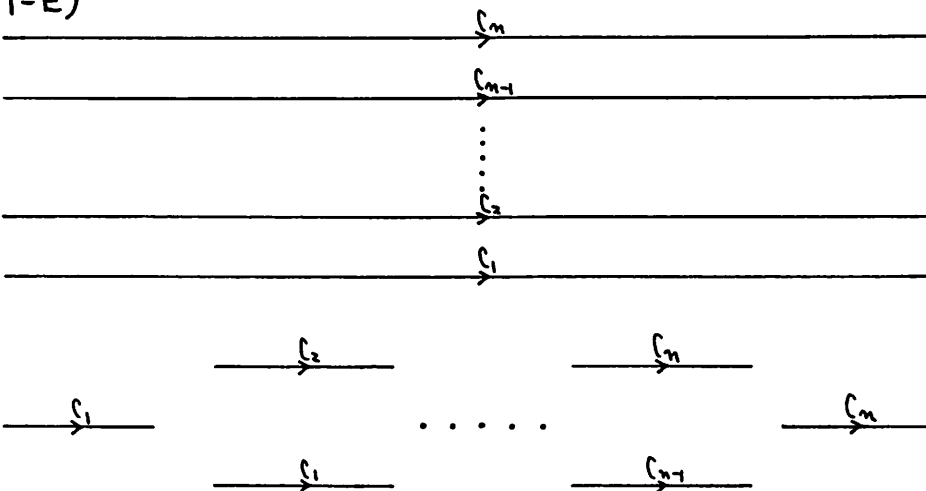


(11-D)

$$\begin{cases} C_m = A_m \bar{B}_m \\ Y_m = Q \bar{R} \end{cases}$$

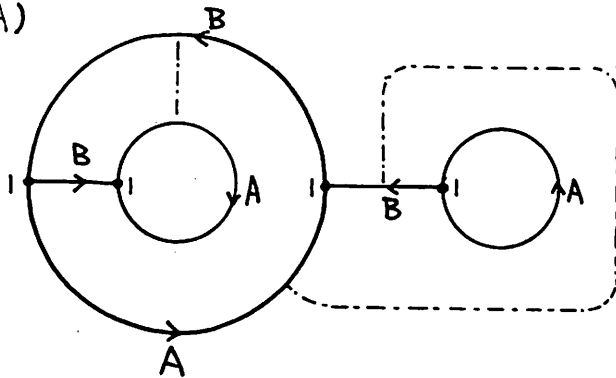


(11-E)



34.

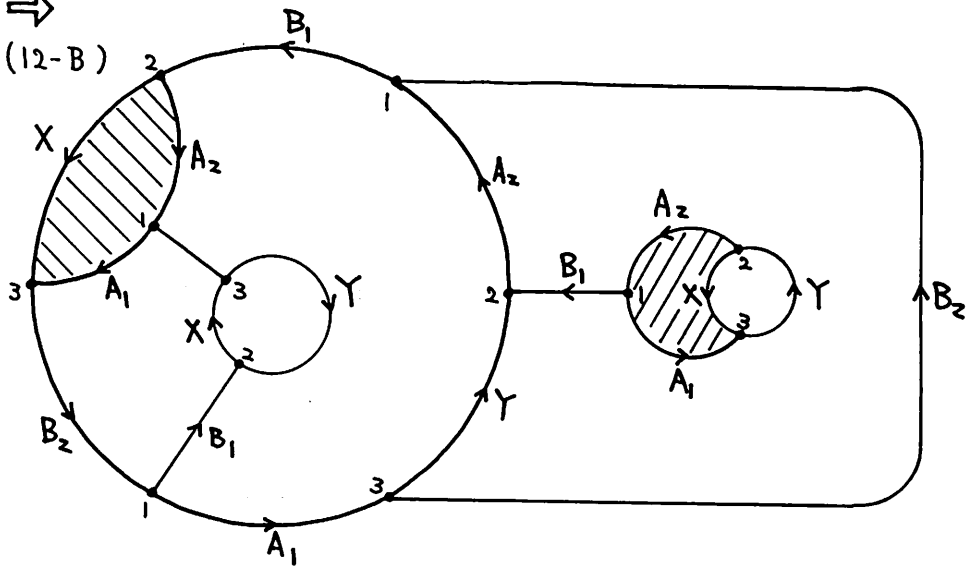
(12-A)



type I^+



(12-B)



type I^-



(12-C)

